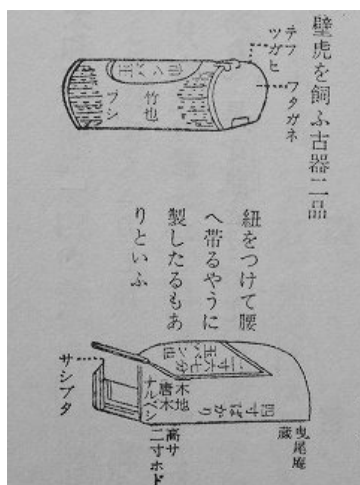


新歳時記通信

創刊号

2008年4月



発刊の辞	1
新歳時記考序説	2
座敷鷹	18

発刊の辞

前田霧人

この度、不定期刊の小冊子「新歳時記通信」を発刊させていただくこととなりました。過日、私は拙著『鳳作の季節』「終章」に次のように書きました。

新興俳句の時代に静塔、楸邨、そして鳳作の待望した「無季有季俳句融合の理想境」は恐らく、これまでの歳時記を根本的に正し、膨大な季語群をその不当な呪縛から解放してやることによって初めて実現出来るのではないかと思う。

この「新歳時記通信」は右を目的として、従来の歳時記を止揚する新しい俳句歳時記の形を具体的に提案するものであり、まず創刊号としてその序説を提示し、このあと随時、各論を掲載して行く予定です。

還暦を過ぎてなお弱輩浅学の徒が弄する拙論ですが、御高覧の上、何かでも御共感をいただくことが出来ましたなら、この上のごときはありません。今後とも皆様の御指導、御鞭撻を心より御願ひ申し上げる次第です。

二〇〇八年四月一日

「新歳時記通信」創刊号

発行日 二〇〇八年四月一日

編集発行 前田霧人

発行所

電話

FAX

メール

*

「新歳時記通信」全文掲載ホームページ
<http://kirihito.holy.jp/saiji/>

*

「表紙図」は『足薪翁之記』に描かれた
ハエトリグモ入れの図。

インターネットサイト「江戸と座敷鷹」
よりダウンロード。(座敷鷹)参照)

新歳時記考序説

前田霧人

第一節 緒言

二〇〇四年、現代俳句協会編『現代俳句歳時記』「春」・「夏」・「秋」・「冬」「新年」・「無季」「ジュニア」全五巻が学習研究社より刊行された。

これは同協会創立五十周年記念事業の一環として一九九九年に刊行された現代俳句歳時記編纂委員会編『現代俳句歳時記』（以下、『原版』と呼称）に所定の改訂増補を行い、五分冊文庫化した普及決定版である。

また、松澤昭『原版』「あとがき」にあるように、金子兜太編『現代俳句歳時記』（一九八九年、千曲秀版社）から、その改訂版（一九九六年、チクマ秀版社）、金子兜太・黒田杏子・夏石番矢編『現代歳時記』（一九九七年、成星出版）と続く一連の集大成をなすものである。

同書は現行の太陽暦に基づいて季節区分の改変を行ったことや、新しく「通季」、そして「無季」の項を設けたことなど、『原版』と共に賛否両論大いなる議論を呼んだ。金子兜太は「序にかえて」で次のように言う。

以上のような特色をもつ歳時記ができたことは、画期的なことなのである。しかし、これを誇示喧伝する気持はない。現俳協五十周年を機として世に問う、の心意であって、この歳時記を契機に歳時記の望ましいあり方について、さらに旺盛な議論が沸くことを念願している。

本考はそうしたこれまでの議論を踏まえつつ、それらとは別の視点で、この『現代俳句歳時記』について新たな検証を行い、その功罪をただ論述するだけでなく、その功を生かし罪を功に換え、従来の俳句歳時記をも止揚する新しい俳句歳時記の形を具体的に提示するものである。

第二節 『現代俳句歳時記』の功罪

二・一 季節区分の改変

『現代俳句歳時記』は「旧来の規準を改め太陽暦に従い、今日の生活実感に即したものととして、現代俳句の名に値する内容とすること」（松澤昭『原版』「あとがき」）を眼目とする。

第一の特色は、現行の太陽暦（明治五年に改暦したグレゴリオ暦、陽暦）に基づいて月次割で三月、四月、五月を春、六月、七月、八月を夏とするなどの気象学的区分で季節区分を行ったことである。

この季節区分が最も大きな反響を呼んだのは、そのことにより「立春」が冬、「立夏」が春に配されるなどの問題が生じたことである。

金子兜太「序にかえて」は「歳時記の多くが、現行の暦との接点を探っているが、かつての太陰太陽暦との妥協の産物であることをまぬかれない。」とし、「立春には、間近に来る春への期待感があるものとして、冬の終わりに配し、名づければ『さきがけ季語』としたものである。」と書く。

言うまでもなく、この季節区分改変の功は「立春」から「立夏」前日まで、陽暦の月次割で概ね二月から四月一杯までを春などとする従来の俳句歳時記と生活実感とのずれを解消する試みの実践にある。勿論、「ずれがある」という前提の上でのことである。

そして、その罪は「さきがけ季語」などという概念を導入しても解消出来ない、主として「時候」季語に露出する季語体系の明白な自己矛盾にある。箇条書きにすれば次の通りである。

① 傍題季語の矛盾

「春来る」が従来そのまま「立春」の傍題として冬、同様に「夏来る・夏に入る」が「立夏」の傍題として春、「冬来る・冬となる・冬に入る」が「立冬」の傍題として秋に配されている。

これらは「立春」、「立夏」、「立冬」が各季節の始まりを示す季語であったからこそこの傍題である。敢えて立項するなら見出し季語から切り離す、あるいは、それぞれ「春」、「夏」、「冬」の傍題とするなどして、従来の俳句歳時記と同じ各季節に配すべきである。

また、「暑中見舞い」の傍題「残暑見舞い」が「立秋以後は残暑見舞いとなる。」と解説されて夏「生活」に配される一方で、次に述べるように「残暑」が秋「時候」に配されているのも整合性を欠く。

② 寒暖に関する季語の矛盾

「立春」、「雨水」までを冬とする一方で、「立春を過ぎてからの寒さ。」と解説される「余寒」、「立春後の寒さという。」と解説される「春寒」が春に配されている。

同様に、「立秋」、「処暑」(残暑の厳しさもこの日を境に収まるという意味。)と解説にある。までを夏とする一方で、「立秋以後も続く暑さという。」と解説される「残暑」が秋に配されている。

季語体系の整合性を保つには「余寒」、「春寒」は冬、「残暑」は夏に配さなくてはならない。

③ 季節の初・仲・晩三区分に関する季語の矛盾

『現代俳句歳時記』の季節区分では、春であれば三月が「初春」、四月が「仲春」、五月が「晩春」、以下、夏、秋、冬も同様となるであろう。

ところが、従来の俳句歳時記と同じく同書にも掲載の「二十四節気表」に明記されるように、各季節の初・仲・晩三区分に関する季語一連は二十四節気と密接に係わり、また、「初春」、「仲春」、「晩春」はそれぞれ陰暦(改暦前の太陰太陽暦)の正月、二月、三月の異名、以下、夏、秋、冬も同様であるなど、陰暦と不即不離の関係に

ある。

したがって、これら一連の季語解説でも当然のように混乱が生じている。例えば春の部では、「初春」は立項がなく不明であるが、「仲春」解説は「春の三か月の真ん中の意。本来は陰暦二月の称であるが、陽暦では四月ごろにあたる。」とある。しかし、「晩春」では「陰暦の三月にあたる。」と、従来の俳句歳時記と同じ解説になっている。

「仲秋の名月」という言葉が既に定着している秋は致命的である。「初秋」が「秋の初めのころ。陰暦では立秋から処暑（八月二十三日ごろ）までをさす。」「仲秋」が「陰暦八月の異称でもある。陰暦八月十五日のこともいう。仲秋の名月。」「晩秋」が「陰暦でいえば九月である。」と、全てが従来の俳句歳時記と同様の解説で何の変りもない。その上で「初秋」が秋に、「立秋」、「処暑」が夏に配されている。

同様に、冬の「初冬」も「一般に冬の初めをいうが、陰暦では、二十四節気の立冬（陽暦十月八日ごろ）から小雪（十一月二十三日ごろ）までをさす。」と解説され、その上で「初冬」が冬に、「立冬」、「小雪」が秋に配されている。

以上、『現代俳句歳時記』の季節区分改変により露出した季語体系の矛盾について列記した。また、次は倉嶋厚『季節の366日話題事典』に付された「二十四気物語」の一節であ

る。彼は立春などを四季の始点とする東洋の暦と春分、夏至、秋分、冬至を起点とする西洋の暦との違いについて次のように解説する。

東洋の季節区分は「昼間の長さ」（この場合は「光の強さ」に相当する）から見ると見事にシンメトリ（対称的）ですが、気温を見ると、寒さのドン底で春が始まり、暑さの絶頂で秋が立つなど、たいへんアンバランスです。これは大気が光の変化に応じて暖まったり冷えたりするのに、約一か月半ほど遅れるからです。その点、西洋の四季の区分は気温についてはシンメトリになっています。東洋の区分は季節変化の原因、西洋は結果に注目しているともいえそうです。

東洋の暦の立春は、まだ厳寒の北風の中に「春の光」を、立夏はまだ冷涼な大気中を横切る「真夏なみの光」を、立秋は暑さの盛りの中で光が「僅かに衰えたとさざし」を、立冬は収穫の終わった野を照らす柔らかな「初冬の光」を見る日なのです。

気温の変化に著しく先行している東洋の季節区分は、真夏の暑さに成熟のタイミングを合わせて、早め早めに細かい農耕順序を勤勉に踏んでいかなければならない水稻栽培の農事暦に適しており、また、しのびよる次の季節の気配をいち早く感じとろうとした歌人、俳人にも積極的を受け入れられたものと思われま

す。本項の始めに「従来の俳句歳時記と生活実感とにずれがあ

る」という前提のことを書いたが、この倉嶋厚の文を読めば、その前提自体が揺らいで来る。

即ち、季語体系に明白な矛盾を生じている『現代俳句歳時記』に言う「さきがけ季語」よりも、従来の俳句歳時記の「しのびよる次の季節の気配をいちはやく感じとろうとした」という意味の「さきがけ季語」の方が、既に確立した季語体系を形成していることにおいても優つていえると言えぬ。

結局、『現代俳句歳時記』の試みの混乱は、二十四節気を規準とする一つの確立した季節区分に直接係わる季語を、もう一つの別の季節区分で再度区分しようとしたことに起因する。

そして、正にそこに「旧来の規準を改め太陽暦に従い、今日の生活実感に即したものを」という同書問題提起の功を生かし罪を功に換える新しい俳句歳時記の形が垣間見えて来るのである。

二・二 「通季」の立項

金子兜太「序にかえて」によれば、「通季」とは「現代の生活の中で季節性が薄れ、どの季節と決め難くなっている季語、現在の季節感覚で特定の季節に属するものとする」ことに無理がある」季語である。

立項された見出し季語は全部で五十九。「風車」、「ぶらんこ」（以上、春）、「冷蔵庫」、「夜店」、「鮎」、「ビール」、「噴水」、「ハンカチ」、「髪洗う」（以上、夏）、「運動会」（秋）、「布団」、「咳」、「ラグビー」（以上、冬）など「生活」四十、「鬮」（春）、「神楽」（冬）の「行事」二、「海猫」（春）、

「鶉」（夏）、「山雀」（秋）、「千鳥」（冬）など「鳥」十五に「鯨」、「海豚」（何れも冬）を加えた「動物」十七と、「生活」、「行事」、「動物」区分に属する季語がその全てを占める。

「通季」立項の功は従来の俳句歳時記の形骸化した一面を明確に指摘したことであり、それを正すための大きな第一歩である。

しかし、例えば「ビール」はやつぱり夏が旨い、消費量も一年でピークを示すなど、「夏」という季節と切り離せない要素を今も堅持する。「通季」に立項された他の季語も同様に、各季節との係わりを無視することは出来ない。

また、「時候」、「天文」、「地理」、「行事」、「植物」以外、「通季」立項の殆どを占める「生活」、「動物」区分の季語は金子兜太の言う「現代の生活、現在の季節感覚」を待つまでもなく、その制定当初から「季節性」が稀薄で、「特定の季節に属するものとする」ことに無理がある」要素を多分に有しているものが多い。

したがって、掲出のものは氷山の一角に過ぎず、そのような季語は「生活」区分で言えば「観潮」（春）、「昼寝」（夏）、「松手入」（秋）、「襖」（冬）、「動物」区分で言えば「海胆」（春）、「蜥蜴」（夏）、「鱒」（秋）、「鼬」（冬）など、詳細に検討すれば他に幾らでも出て来る。

正岡子規は「四季の題目にて花木、花草、木実、草実等はその花実の最多き時を以て季と為すべし。」（『俳諧大要』）と述べているが、これは「植物」区分の季語の各季節への配

置の根柢を与える一方で、季節との係わりが最も深いと思われる「植物」区分の季語にさえ、季節と係わりのない要素を見出すことが出来ることを逆に示唆している。

即ち、「生活」、「動物」に「時候」、「天文」、「地理」、「行事」、「植物」を加えた全ての区分の季語は、季節に係わりのある要素を有すると共に、季語、「無季」語の別なく全ての語が持つ季節とは係わりのない要素をも同時に有する。

従来の季語、「無季」語に「通季」語という概念を加えることにより季語体系、言葉体系を更に分断化するのではなく、このような事実を正しく認識することにより、より高い更なる視点に昇華させることに、「通季」立項最大の意義がある。

季語は(略)季感を表現するという特殊的作用を有するのみならず、更に季感に非ざる諸他の感覚又は感情を表現するという一般的作用を有している。そこで、季語制度の下に於ては、季語を持ち、しかも季感の表出を持つところの俳句の存在することは勿論であるが、それと共に他の一方に於て、季語を有しながらも尚且つ季感の表出を持たぬところの、すなわち、詩的感動の要素を季感が構成せずに季物の一般的性質に対する感覚又は感情が構成するところの(略)俳句も亦当然に発生する。(略)

かくのごとく、季語制度は、それが所詮、季感を俳句の感動の不可欠的要素となすところの観念にもとづく筈のものであるにもかかわらず、他方実際の作品において、季感をもたないものをも生みいだすという矛盾を有する

ことよつて、必然に崩壊すべき運命をもつものである。既に新興俳句時代の昭和十年、渡辺白泉は「季語の作用と無季俳句 上、下」(句と評論 九、十月号)でこのように指摘し、時を同じくして発表された岡崎義恵「季題の意味」(「俳句研究」九月号)の次の一節を引用する。

芭蕉の名句で最高の象徴詩的風格を示しているものは、季語が季感を象徴する為でなく、寧ろ季を超越して一路造化の玄境に迫る為である。「古池」の句の「蛙」が春であり、「閑かさや」の句の「蟬」が夏であり、「荒海」の句の「天の川」が秋であるという様な事は、此等の句では殆ど問題とならないのである。一般に日本の性格は印象的であり現実的であつて、象徴的、理念的ではない。芭蕉の此等の句は、永く浸潤した支那・印度的精神の發現であると見られる点が多く、季感の表現としては成功したものとは言えない。此境では個々の言葉や物象は或季節を暗示するのではなく、一層普遍的な宇宙の秘密を指さす象徴としての役目をなすのであつて、日本の季語の能力を超えて居るのである。

そして、「僕白泉の分類に従えば、これらの句はすべて無季俳句に属せしめらるべきものである」と付言して更に次のように結び、今日の状況までも予言している。

これは事実上無季俳句認容の結果を示しているとみるべきものであつて、将来、政治における経済における宗教における美術における文芸における国際的関連の高度

化の結果、必然的にこのような日本の季語としての機能が、日本的ならざる普遍的な「象徴的、理念的」な性格の参加した方向へみちびかれるべく運命づけられるであろう。

渡辺白泉は「季節を有せず、季語を有する」無季俳句の例として、当時の「馬酔木」領袖たる水原秋桜子の句、十九句を同文に挙げてはいるが、その大半を占める十七句の季語が『現代俳句歳時記』で「通季」に立項された「ラグビー」、「鶴鶴」始め「水泳」、「踏絵」、「熱帯魚」、「蝶」など、何れも「生活」、「行事」、「動物」区分のものであることは非常に興味深い。

彼は更に自句を例に夏季「植物」区分の季語「立葵」について自説を展開するが、より鮮明で分かり易いのは、渡辺白泉の二カ月前に吉岡禅寺洞が「無季俳句を提唱するまで」(「天の川」七月号)に述べた次の一節である。

大正八年

海苔買ふや追はるる如く都去る

を私は作った。この句はいうまでもなく、都を去るもの淋しい姿であり、故郷への思慕と(略)プロレタリアの抱懐する心象でもある。「海苔は春の季語だ」という季節制度下の辞令が、この句に与えられたことは勿論であるが、それにもかかわらず、春とか冬とかの季節を通してよりは、田舎者の自分が、東京の浅草海苔を土産に買うことであればそれでよかつたのだ。

「通季」立項の理念を渡辺白泉や吉岡禅寺洞が指摘する視点にまで高め、季語と次に述べる「無季」の立項との間で両者を分断することなく、むしろ有機的に結び付けるものとするにより、従来の俳句歳時記をも止揚する新しい俳句歳時記の形が臚気ながら具体的となつて見えて来る。そして、そこにこそ「通季」立項最大の功が存在しているのである。

二・三 「無季」の立項

『現代俳句歳時記』の最大の功は何と言っても「無季」の立項、それも「雑」という従来の古い言い方ではなく、初めて堂々と「無季」と銘打つたことである。金子兜太は「序にかえて」で次のように述べている。なお、文中の「歳時」は「一年中のおりおり。年と時。年と季節。」(『広辞苑第四版』)の意であり、正しくは金子兜太『原版』「序に代えて」中で用いられた「歳事」である。

歳時記に何故「無季」語が入るのかと疑念を持つ向きは、歳時記の成り立ちを承知していないのではなからうか。歳時記の名称は、もともと中国の行事暦や生活暦に関する書を指している。これを季によつて整理するようになるのは、連歌の発生・普及による。連歌が、発句に当季の景物を詠むことを約束とし付け合いの中でも季をあれこれと表出することを大切にしながらである。

広義に受け取つて歳時記とは、「歳時にかかわる語の集成」とすることが歴史的にも正しいのであつて、これを単なる季語集とするのは狭い。歳時とは一年中の出来事

であり、仕事の謂である。近代から現代へと私たちの生活は、海外からのさまざまな文化・文明を受容し消化しながら、拡大し複雑化してきた。それにもなつて言語も多様化し、季によつて整理される語が増加する一方では無季の語も増えている。季語を増加させながら、無季語をも収録していく、それは自然な行為であつて、歳時記のあるべき姿なのだ。

無季俳句の存在については、右の金子兜太の言と共に、二〇〇六年に刊行された福田基編『林田紀音夫全句集』（富士見書房）のことを述べれば、それで足りるであらう。

林田は「鉛筆の遺書ならば忘れ易からむ」などの句で昭和俳句史上に刻印される無季俳句の鬼才である。その彼の全句集刊行は有季派を含め俳句界全体に大きな反響を呼んだ。

有季派有力俳人の一人、片山由美子が「本句集に収められた作品のいくつかは、正直なところ私にとって禁断の魅惑を感じさせた。」（『句集ベスト5―発見の喜び』「2007年版俳句研究年鑑」）と述べたことは記憶に新しい。もう、そんな時代に來ているのである。

それでは、「無季」立項の罪とは何か。それは「通季」立項の所でも述べたように、季語、「通季」語、「無季」語という言葉全体を貫き、それら全てを有機的に結び付け体系化する確固とした理念の不在と、そのことによる季語体系、言葉体系の分断化である。

例えば、夏の季語「水泳」（傍題に「競泳」）があり、無季

「スポーツ」傍題に「水泳」がある。夏通季に「ハンカチ」があり、無季「タオル」傍題に「ハンカチ」がある。同じような冬のスポーツで「マラソン」が無季、「ラグビー」、「サッカー」が冬通季、「駅伝競走」が冬の季語と区別される。

また、秋の季語「夜学」が無季を含め何処にも立項がなかったりする。それら一つ一つは些細なことかも知れないが、そこには右に述べた確固とした理念の不在と、そのことによる季語体系、言葉体系の分断化が見え隠れする。

ここまで言及して来れば、本考に提示する新しい俳句歳時記の形がもう具体的に明らかになつていたのであるが、それについては節を新たに述べることにする。

第三節 新しい俳句歳時記の形

『現代俳句歳時記』の功と罪について前節で述べたが、その功は「現行太陽暦によつて培われてきた生活実感にあわせること」を最大の眼目とし、新しい季節区分の提唱を行うと共に、従来の季語に加えて「通季」、「無季」の語を新たに立項したことである。

特に、これまでは「雑」という従来の古い呼称に終始していたものを、誰はばかることなく堂々と「無季」としたことは最大の功であり、一つの大きな壁を打ち破る快挙であった。

そして一方、その罪は季節区分改変により露出する季語体系の明白な矛盾であり、有季、通季、無季にわたる言葉全体

を貫き、それら全てを有機的に結び付け体系化する確固とした理念の不在と、そのことによる季語体系、言葉体系の不統一、分断化である。

それでは、そうした『現代俳句歳時記』の功を生かし罪を功に換え、従来の俳句歳時記をも止揚する新しい俳句歳時記の形とは如何なるものか。

本考の冒頭で、この『現代俳句歳時記』のベースに金子兜太・黒田杏子・夏石番矢編『現代歳時記』（一九九七年、成星出版）があることを述べた。金子兜太はその「あとがき」で次のように述べるが、既にその中に大きなヒント、解答が明らかにされているのである。

季語は古くから季題と呼ばれてきたのだが、これは季節感とともにある事物を指示しているばかりでなく、その事物への人の感受や物想いが含まれている。〈もの〉と想いの二重構造〉といってもよく、〈もの〉を美意識化したところに現出した「造語」といってもよい。別な言い方をすれば、季節感を軸としておこなわれた造語ということである。

それが季語。その季語とは別に、季節感ではなく、そのものの〈物象感〉を軸とした美意識化もあり得る。季節感が得難いときでも、物象感を軸に美意識化が出来るということ、で、「春の山」は季語だが、「山」は季語ではない。しかし、「山」の物象感を十分に活かせば、季語同様に天然自然との交感を可能にする、ということなので

ある。

そうした語群（つまり物象感を軸にした「造語」群）を集めたのが、「雑」である。

また、『現代歳時記』のもう一人の編者でもある夏石番矢は『現代俳句キーワード辞典』（一九九〇年、立風書房）の「はじめに」季語からキーワードへ」で、近代以降現代に至るまで、擬似アンソロジーとしての歳時記を含め、俳句における優れたアンソロジーが欠けていると指摘した上で、その原因について次のように論じている。

まずは、アンソロジーを編む基準の問題。近・現代俳句において、すでに数多くの無季の秀句が生み出されているにもかかわらず、季語を中軸とする編集方針が基本的に疑われていないことが、最大のネックになっている。近年いくつかの歳時記に、俳枕（地名）、雑の部、季語以外の詩語を項目として立てる風潮が見られるようになった。これも前進と言えば前進と言えるかもしれない。けれども、それらの編集の思想は、木に竹を接ぐ不整合性をやはり露呈しているにとどまる。本当は、季語も俳枕も詩語も、一つの土俵の上に乗って再編成されるときがきているのである。

歳時記は、元来は暦もしくは年代記を意味することば。日本の暦は、古代の暦を別にすると、いくつかの中国の暦を借用してきたにすぎず、明治五年（一八七二年）以降は、ヨーロッパの暦を採用している。時間意識がまだ

借りものを脱しきれない日本において、明確な世界観やコスモロジーを読み取らせることのできる歳時記は一度も成立しなかったと言っても過言ではない。

「短詩型に託されるのが、日記風の季節感だけとしたら、たいへんおそまつな話だ。季節感を突きぬけた世界観や宇宙観、あるいは人間観が問われない詩などは、滅亡すればよい。日本語によって最も端的にコスモロジーや人間観が表現できるのが俳句であれば、有季・無季の次元を超越した分類基準が当然必要になってくる。そこで、この本ではキーワードという詩的中核語を項目の柱として立ててみた。

「時間意識がまだ借りものを脱しきれない日本」というフレーズの是非は暫く措くとしても、夏石番矢の論は核心を突いている。同書は「辞典」と銘打つたためか、五十音順の「俳句キーワード」立項であり、新しい俳句歳時記の域にまでは達していない。

しかし、全キーワード二百四十五のうち季語は約一割の二十五、あとの九割は「無季」語である。従来の季語に代わり、こうした「無季語を中軸とする編集方針」を兎も角も打ち立ててみせたことは、これもまた一つの大きな壁を破る画期的なことであった。

この試みを新しい俳句歳時記の形にまで昇華し、「木に竹を接ぐ」のではない「季語も俳枕も詩語も、一つの土俵の上に乗って再編成」した「明確な世界観やコスモロジーを読み取

らせることのできる歳時記」を打ち立てるには、金子兜太と夏石番矢の論を合体させれば良い。

金子兜太は「物象感」という軸を「無季」語にのみ適用したが、この軸は季語にも共通するものである。即ち、季語、「無季」語が共有する「物象感」の軸を、夏石番矢の言う「有季・無季の次元を超越した分類基準」に採用すれば良いのである。

金子兜太の例で言えば「山」、「谷」、「嶺」など「無季」語と「春の山」、「夏の山」、「山笑う」、「山滴る」、「山開き」、「登山」、「雪山」、「アイゼン」など季語一連を、共通する「山」という「物象感」の軸で一本に体系化する。

換言すれば、『現代俳句歳時記』を含め従来の俳句歳時記の究極最大の問題点は「まず始めに季節分類ありき」として、季節区分をその第一義としたことにある。そして、新しい俳句歳時記の形とは、金子兜太の言う「物象感」の軸を第一義とし、従来の「季節感」の軸は第二義以下のものとするものである。

また、「物象感」の軸は従来の「時候」、「天文」、「地理」、「生活」、「行事」、「動物」、「植物」がまず基本に挙げられるが、人は「時候」、「天文」、「地理」に係わる時間空間の中で、「動物」、「植物」と共に、かつては「人事」で括られた「生活」、「行事」を営んでいる。したがって、それら相互間を有機的に結び付け体系化するためには、相応の再編成が必要である。

このような「物象感」の軸を第一義に採用した新しい俳句歳時記は、従来の季語に「無季」語を加えた「俳句キーワード」を一本に体系化出来るだけでなく、従来の俳句歳時記に生じている大抵の問題が解決出来る。

「季節感」の軸を第一義としないことにより、季語を無理矢理一つの季節に限定する必要がなくなり、複数の季節にまたがって記載することも当然に可能となるからである。

従来の季節区分と生活実感とのずれの問題は、「時候」季語を中心に既に体系化が出来上がっている従来の区分を規準とした上で、四季を表す「春」、「夏」、「秋」、「冬」などの季語は「春」なら陽暦三月から五月までなどとする生活実感としての区分を併記する。そして、暦の上の春と生活実感としての春を、その時その人の気分で自在に詠めば良い。

「初春」、「仲春」、「晩春」など各季節の三区分一連も同様で、従来の解説に「初春」なら三月、「仲春」なら四月、「晩春」なら五月と、陽暦の生活実感をベースにした区分を併記する。「仲秋の名月」という言葉が既に定着している「仲秋」は「定着しているから」と事実のまま、そう解説してやれば良い。

陽暦、陰暦双方で行事がある「桃の節句」、「七夕」、「盂蘭盆会」などの問題は双方の行事を、関連季語も絡め、複数の季節にまたがって包括的に解説すれば何でもない。

「広島忌」、「長崎忌」の間に立秋が来ることで俳句歳時記により夏、あるいは秋に配される「原爆忌」の問題は、他の

季語と同じに「季節感」の軸で区分することが、そもそもその誤りである。

こうした「季語」は、例えば「戦争と平和」という「物象感」の軸を設け、「十二月八日（開戦日）」、「三月十日（東京大空襲忌）」、「沖繩忌」、「終戦記念日」など一連の中に収め、「兵士」、「戦場」、「銃後」、「戦後」、「基地」、「平和」など「無季」語と共に一本に体系化する。

「古季語」、「絶滅寸前季語」と言われるものも、「物象感」の軸を第一義に、他の季語との連携の中で生かすことが出来れば、伝統を継承する宝として永く守って行ける。

例えば、「出替」、「後の出代」は今で言えば春と秋の「人事異動」（『現代俳句歳時記』に立項はないが）に当たるなどという具合に収めて行く。また、「稲作」、「年末年始」などという大きな軸で、沢山のそうした季語を収めることが出来る。

海外の風物、地名など海外詠に係わるものは、「海外」という大きな「物象感」の軸の中に、佳句の例句を基準に、地域別、分野別に立項して行く。従来の俳句歳時記に所収の「蜃気楼」（春）、「白夜」（夏）、「氷河」（夏）なども含め、安易な季節区分に随することなく、きちんとした体系化が望まれる。

地方の季語、俳枕など地名はそれぞれの軸で体系化する。沖繩、九州から東北、北海道まで南北に長い日本でこれだけの俳句人口があるのだから、「物象感」の軸を第一義とする地方俳句歳時記を各地方でどんどん作って行くことである。

俳句歳時記は幾らあっても良い。俳句歳時記に載っていない

ければ季語でないという従来の權威主義的であり方こそが問題である。俳句として立派に成立していれば、それで季語、詩語として認めるということが当たり前にならなければならぬ。

「物象感」の軸を第一義とする新しい俳句歳時記は他にも大きな効用がある。一つは、次節に例を挙げるように「物象感」の軸を第一義に従来の俳句歳時記を再編し、通覧することにより、これまで「季節感」の軸で分断されて見えなかったことが様々明らかになって来る。

また、「俳句キーワード」としての季語、「無季」語、例句としての有季俳句、無季俳句が渾然一体となって配列されることにより、有季と無季の世界を隔てる垣根が低くなることが期待される。

新興俳句の時代に平畑静塔、加藤楸邨、そして、篠原鳳作らが希求した「無季有季俳句融合の理想境」実現に向けての第一歩が、まずこの新しい俳句歳時記から始まるということになれば、それ以上のことはないのである。

夏石番矢は先の著書で「日本において、明確な世界観やコスモロジーを読み取らせることのできる歳時記は一度も成立しなかった」と書いている。しかし、俳句歳時記という形ではなく、また、その分類、立項の仕方也不必しも完成されたものではないが、「物象感」の軸を中核に据えた俳句アンソロジーは既に過去にあった。

一九六九（昭和四十四）年に刊行された三谷昭編『現代の

秀句』（大和書房）である。そして、その中には先に述べた「戦争と平和」という区分が全十二区分中の一区分として掲げられている。

三谷昭は既に昭和十一年、「もろもろの季語の姿」（『京大俳句』四月号）で、前節に述べた渡辺白泉の論を引用して大なる賛意を表明すると共に、「季語などと云う特殊なカテゴリーを一切排して、あれを一度単語に還元してしまつたら、さぞかしさっぱりするだろうと云う途方もない考え」を持つていと明言している。その彼にして、この編著は当然の帰結であると言うことが出来る。

三谷昭の言う所は、今のように「語」の中に季語と「無季」語とが別々の「カテゴリー」としてあるのではない。「単に語」があつて、その一つ一つの中に「季節」に係わりのある要素と係わりのない要素がそれぞれに、あるいは渾然一体となつて共存する。そんな世界である。そして、俳句の本来である和歌（短歌）はもう疾うの昔に、そういう所に到達しているのではないかと思われるのである。

第四節 「大根」季語に見る具体例

冬の季語「大根」を例に、新しい俳句歳時記の形を具体的に考えてみる。従来の俳句歳時記の代表として二〇〇六年刊、最新の大歳時記である『角川俳句大歳時記』を採用し、「大根」に係わる季語全体を掲載順に抽出した一覧を文末に示す。

「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「新年」という「季節」軸と「生活」、「行事」、「植物」という一律の「物象」軸、あるいは解説執筆者の多様により縦横に分断された「大根」の全貌がそこにある。

中心となる冬「植物」の「大根」には「地理」、「生活」、「植物」など様々の範疇に属する傍題・関連季語が無造作に詰め込まれている。また、「三冬」、「初冬」など、表中の季節区分はそれが第一義であった故の必然ではあるが、何れにしても細分に過ぎる。

そして、「晩秋」に「浅漬大根」、「初冬」に「浅漬」があり、「べつたら市」が「晩秋」、「べつたらづけ」が「初冬」であるなどは、直ぐに目に付く未整理、矛盾である。

長い年月を経て蓄積され培われて来た財産とも言えるこれから季語一連を「大根」というキーワードのもとに一つに纏め、一本筋の通ったストーリーとして展開する。「物象」軸を第一義とする新しい俳句歳時記の形とはそのようなものである。

具体的には、従来の「生活」、「植物」などの区分を再編する中で「野菜」という大枠の軸を設け、その中に「大根」を位置付ける。そして、種類（季節・品種）、ライフサイクル（栽培・収穫・処理）、利用（料理・漬物・風呂）、行事、正月という具合に再編し、展開して行く。

ざっとであるが、やってみれば次のようになるであろう。料理（ご飯物・汁物・惣菜）、漬物、風呂、正月に係わるものなどは、それぞれの軸を新たに設定し、その中に一括するの

も方法である。

季節—春大根（三月大根・四月大根）・夏大根・大根（秋冬大根）

品種—青首大根・理想大根・辛味大根・野大根・桜島大根・守口大根・聖護院大根・方領大根・三浦大根
練馬大根

栽培—大根畑・大根蒔く・間引菜・中抜大根・茎立・大根の花（浜大根の花）

収穫—大根引き・大根洗う（土大根）・大根市（大根売）
処理—大根干す（新干大根・干大根）・干菜吊る・切干
作る

料理—大根時・ご飯物（菜飯）・汁物（大根汁・干菜汁）
惣菜（煮大根・風呂吹・大根おろし・千六本）
漬物—浅漬（べつたらづけ）・沢庵漬製す・茎漬・奈良漬
製す

風呂—干菜湯
行事—べつたら市・ねまつり・鳴滝の大根焚

正月—大根祝ふ・幸木・蓬菜・鏡草・齒固・七種（蘿蔔）
若菜（薺打つ）・若菜祭（菜摘川の神事）

季節との係わりで言えば、平成十八年東京都・大阪市・大阪府中央卸売市場年報のデータなどを見ても、大根は安価（春・夏の半値）で味が良いとされる秋・冬が確かに旬と思われる。また、その一方で「春大根」、「夏大根」がある通り、冬・春は九州・四国・近畿・関東など、夏・秋は東北・北海

道などを主な産地として、一年中あまり大差なく出回っている。詳細には、農家と家庭菜園、品種、地方などにより多様であろう。

このように一年中栽培され利用される大根であるから、季節との係わりは行事、正月関係など以外、無理矢理一つの季節に限定することなく、複数の季節、通年も含め、きちんとした根拠と見識で以て位置付ける。

例えば、「大根おろしのうまいのは、初夏」（杉浦明平「私の家庭菜園歳時記」と言う人は多く、うどん・蕎麦の菜味、山菜・きのこの天ぷら、秋刀魚などに一年中重宝する。

また、インターネットで検索をしてみても「菜飯」は春に限らず冬、通年、谷川俊太郎の詩「午の食事」には、秋の「風呂吹」が見事に詠み込まれている。

家庭で、料理屋で一年を通して食べられるのであれば、それぞれの季節で大いに味わってみることである。季語の本意の本意は俳句歳時記の中にあるのではない。それは自らの中に、日々の生活を通して、独自に形成して行くものである。

『角川俳句大歳時記』には「図説俳句大歳時記」（一九六四〜一九六五年、角川書店）を踏襲した「考証欄」が付されている。それら貴重な資料を参照しつつ、最新の資料と現在の視点による季語の再考証が今、本当に求められていると思う。

伝統的な美意識や生活感情を反映した文学的な「虚構の世界」が大切なのは勿論のことである。自らの「虚構の世界」を獲得すること、あるいはそれが全てかも知れない。しかし、

それが形骸化した誤った認識と権威主義とで覆い隠された「虚妄の世界」であってはならないのである。

次節に大須賀乙字の論を紹介するが、彼は「季節その物と季節の俳句における作用とは区別して考えねばならぬ。俳句に詠ぜられてこそ季語ともなるが、俳句を離れては季語はないのである。」と言っている。

先の渡辺白泉の論とも合わせ、要は「大根」の何処に着目し、どう詠むかである。句としての「大根」を詠むだけが全てではないことは言うまでもないであろう。

また、「大根（役者）」、「大根足」など、「大根」に由来する「無季」語も、立派に俳句として詠めるのであれば、積極的に挑戦してみれば良いのである。

第五節 結語

本考を書くに当たって最初に注目したのは、新傾向俳句の論客として明治末から大正期にかけて活躍した大須賀乙字の俳論である。村山古郷編『大須賀乙字俳論集』（講談社学術文庫）から、本考に最も係わりの深い一節を抜き出してみよう。

季節感想（それは季節とは違う）は、時代によって、大体の傾向が変化し、その概念はだんだんと細密になって来ている。それは言葉の約束の変化に過ぎない。（略）
また季といえは、四季の別すなわち春夏秋冬の別をさして、いずれかの季に収めなければならぬように考えて

いたのである。僕はその四季の別を全く撤し去つて、一々の景物気象に感情が象徴されるものとして、一つの季語があるいは春夏にわたるものがあり、あるいは夏秋にわたるものがあり、あるいは三季にわたるものがあつて、単に季語としては何の意義をも与えないことにしなければならぬと主張するのである。俳句に詠ぜられてこそ季語ともなるが、一語とり放つて「秋風」といつても季語とはしないのである。一俳句の統一的情趣のうちに作者の情意的活動が融け込んで自我を没した場合に、季感というものが成り立つのであつて、季語とは、かような場合の中心的景物を指しているのであるから、俳句を離れては季語はないのである。（「季感象徴論」「常磐木」大正八年一月号）

大須賀乙字は「季題の意義を論ず」（「人生と表現」大正二年十月号）でも「季題その物と季題の俳句における作用とは區別して考えねばならぬ」、「季題は俳句の約束であるというは、俳句という形式上、必要条件であるという意味で、季題の感想には一定不変の約束があるという意味でない」、「四季の分類に季題の意味のあるのでない」と、同じ内容をより簡潔に述べている。

このような大須賀乙字の論が、先に紹介した渡辺白泉「季語の作用と無季俳句 上、下」（二句と評論）昭和十年九、十月号）のベースにあることは、「大須賀乙字の季題論」が「俳句作家、俳句批評家たちの一度は目を通すべき必読」のものとして文中に明記されていることから、容易に窺い知ることが出来る。

大須賀乙字は無季俳句のことまでは言及していない。しかし、先の「季題の意義を論ず」文中に「蟹かに一つ詠むことを許すも許さないもないので、その物に感興を催したならば、それで立派な句を仕立てて見るがよいのである。」との一節があり、「その物」を「無季の物」とすれば、それは無季俳句容認の言葉ともなる。

こうして見ると、本考で提示した「物象感」の軸を第一義とする新しい俳句歳時記の形は、正岡子規の俳句革新以来、遠くは「新傾向俳句」の大須賀乙字、「新興俳句」の渡辺白泉、三谷昭、近くは「前衛俳句」の金子兜太、「世界俳句」の夏石番矢など、それぞれの時代に所謂「反虚子」の大きなうねりの中でその一翼を担った、あるいは現在も担っている人たちの思いが一本の線につながった所に位置するとも言えるのである。

冬					秋					夏			春					巻			
生活	生活	生活	生活	生活	植物	植物	生活	生活	生活	植物	生活	植物	植物	植物	植物	植物	植物	生活	部		
三冬	初冬	初冬	三冬	三冬	仲秋	仲秋	仲秋	晩秋	晩秋	三夏	晩夏	晩春	初春	晩春	晩春	仲春	仲春	三春	三春	区分	
277	277	276	275	267	587	586	261	219	200	636	202	634	577	577	576	576	576	572	566	201	頁
茎漬	浅漬	新干大根	風呂吹	干菜汁	中抜大根	間引菜	大根蒔く	浅漬大根	べつたら市	夏大根	奈良漬製す	浜大根の花	桜島大根	四月大根	野大根	三月大根	春大根	茎立	大根の花	菜飯	見出し季語
庄す	べつたらづけ		風呂吹大根		疎抜大根・虚抜大根・間引大根	く・まびき・疎抜菜			夷子講市・浅漬市					細根大根・弘法大根・浜大根・野良大根		二年子大根・春福大根・春若大根・苗代大根・秦野大根	くきだち	花大根・菜大根の花・種大根	菜飯茶屋	傍題・関連季語	
4	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	3	3	2	諧句
22	3	0	14	3	0	25	6	1	5	4	0	1	1	0	1	0	9	14	19	9	解説執筆者
大石悦子	森賀まり	伊藤伊那男	森賀まり	佐怒賀正美	榎本好宏	榎本好宏	中村和弘	池田澄子	西嶋あさ子	太田土男	茨木和生	高澤晶子	上野一孝	上野一孝	上野一孝	上野一孝	上野一孝	依光陽子	依光陽子	西宮舞	

「大根」季語一覽(『角川俳句大歳時記』より掲載順に抽出、「諧」は近世、「句」は明治以後の例句数)

										新年													
植物	植物	植物	行事	行事	生活	生活	生活	生活	生活	植物	行事	行事	生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活	生活			
上旬	上旬	上旬	上旬	上旬	上旬	上旬	上旬	上旬	上旬	三冬	仲冬	仲冬	初冬	初冬	初冬	初冬	三冬	三冬	三冬	初冬			
439	435	433	375	375	187	183	147	119	116	76	592	440	407	349	348	348	343	328	288	287			
蘿蔔	若菜	鏡草	菜摘川の神事	若菜祭	薺打つ	七種	大根祝ふ	蓬菜	幸木	歯固	大根	鳴滝の大根焚	子祭	干菜吊る	大根干す	大根洗	大根引	干菜湯	切干作る	沢庵漬製す			
清白	朝若菜・磯若菜・磯菜・京若菜・千代名草・祝菜・粥草・七草菜	加賀見草	若草神事・若菜神事・七草祭・七種祭	拍子	薺打・七草打・七草たたく・七草はやす・若菜はやす・薺はやす・薺の	七草・七種粥・薺粥・若菜粥・七雑炊・七日粥・若菜の日・宵薺・二薺	大根飾る	大根餅	歯固の餅・火鑊餅	大根焚	だいご・おおね・大根畑・沢庵大根・青首大根・三浦大根・練馬大根・理想大根・方領大根・聖護院大根・守口大根・辛味大根・千六本・土大根・大根時・大根汁・大根おろし・煮大根・大根市・大根売	福来・子燈心・燈心売・二股大根・嫁大根	懸菜・吊菜・干菜・干葉	懸大根・干大根	大根洗う	だいご引き・大根引く・大根馬・大根舟・大根車	干菜風呂	切干・割干・白髪切干・花丸切干	切干・割干・白髪切干・花丸切干	沢庵漬ける・新沢庵・新漬沢庵・早漬沢庵・大根漬・大根漬ける			
1	25	0	0	0	11	23	0	21	0	6	5	0	4	5	1	0	8	0	0	0			
1	6	1	0	0	12	45	1	25	7	7	35	20	1	7	31	4	10	3	14	6			
藤田直子	藤田直子	ふけとしこ	茨木和生	出口善子	權未知子	權未知子	中田尚子	長谷川權	出口善子	岩田由美	高澤晶子	山根真矢	中村和弘	井上康明	太田土男	太田土男	太田土男	仲寒蟬	小林貴子	小林貴子			

座敷鷹

前田霧人

余りに好かれているとは言えない蜘蛛は俳人にとつても同じのようである。『角川俳句大歳時記』の例句を数えてみても、虫類のベスト3である「虫」、「蝶」、「蟬」は勿論のこと、「蠅」、「蚊」、「蟻」にも及ばない。

ところが、今年の雛祭の夜、ひよんなことから蜘蛛の世界にのめり込んでしまった私は、蜘蛛が実に愛すべき存在であり、如何に人との係わりが深く、また、人の役に立っているかを知った。そこで、蜘蛛がもつと俳人に愛され、もつと俳句に詠まれることを願って、ここにその一端を紹介することとする。

まず、動物分類上の蜘蛛は動物界に三十五ある動物門の一つ、節足動物門の中に、近縁の壁蝨、蠍などと共に、昆虫、海老、蟹、蜈蚣、馬陸などと並んで位置する。

日本の蜘蛛は、海岸から高山まで様々な環境に現在約一四〇〇種が記録されている（*5）。網を張るもの張らないもの、一カ所に留まるもの徘徊するもの、住む所は地中・地表・空中・草間・樹幹・洞穴・水中、住居は袋状・管状・膜状・木の葉を巻くもの・土やゴミを集めるものなど、その生活型は

正に多種多様である。

蜘蛛に関する季語は『角川俳句大歳時記』には「蜘蛛」（女郎蜘蛛）、蠅虎（蠅取蜘蛛）、「蜘蛛の囀」（蜘蛛の巢・蜘蛛の網・蜘蛛の糸）、「袋蜘蛛」（蜘蛛の太鼓・蜘蛛の袋）、「蜘蛛の子」、「雪迎へ」（遊糸）が掲出されている。括弧内は傍題・関連季語である。また、これらの季節区分は晩秋の「雪迎へ」以外、全て夏（三夏）となっている。（「雪迎へ」については別途書くこととし、ここでは触れない。）

考証欄によれば「蜘蛛」、「蜘蛛の囀」は雑、「蠅虎」は四月、六月、三夏、「蜘蛛の子」は四月（以上、全て陰暦）、初夏、夏、「袋蜘蛛」は考証がない。雑では俳句に詠めず、初夏では細分に過ぎる。それで三夏となったものであろうか。

実際はどうか。主なクモの出現期、産卵期、網型、特徴を参考文献（*5、*6、*7）から抽出作成した文末の表を参照すれば、「蜘蛛」、「蜘蛛の囀」の季節は夏秋、通年、「蜘蛛の子」は夏秋（クサグモの子は春）、「女郎蜘蛛」は秋、「黄金蜘蛛」（女郎蜘蛛と呼ぶ地方が多い）は夏秋、「蠅虎」は夏秋、通年となる。表中のクモは一四〇〇種ある中のほんの一部である。夏などに限定することなく、見た時見たまま、思うままを自在に詠めば良いのである。

クモの雌が受胎すると、その卵囊が太鼓のように膨れあがる。この膨らんだ卵囊のことを蜘蛛の太鼓、蜘蛛の袋といい、その袋を持っているクモのことを袋蜘蛛という。卵を産んで袋に入れ、尻につけて持ち歩き、保護し

ている。

これは『角川俳句大歳時記』「袋蜘蛛」の解説であるが、膨れ上がるのは卵巣があるクモの腹部で、産褥となるべきシートを糸で作り、その上に産卵し、更になら糸で覆い保護したものが卵囊である。

また、卵囊を尻につけて持ち歩くのはコモリグモの仲間で、卵囊保護の一形態に過ぎない。口に啞えて持ち歩く(アシダカグモ)、覆い被さる(ササグモ)、住居内で同居する(ジグモ)、網に掛け近くにいる(ゴミグモ)、他のクモの網に吊す(イソウロウグモ)、丈夫に作り保護しない(コガネグモ・ジヨロウグモ)など多種多様、まるで人間の母親と同じである。クモは他にも人間と似通った所が多くある。同じく母性愛関連で言えば、口づけで食物を与えて世話をするヒメグモ、子グモが独り立ちするまで背中におんぶするコモリグモ、究極は臍を嚙らせるどころか、子グモに母親の体を食わせてしまうカバキコマチグモまである。

また、クモは一般に雌は大きく良く肥えて堂々たる肉体美を見せているが、雄は小さく痩せっぽちのごつごつした骨体美で毛深い。まるで人間と同じなのであるが、雄が雌に示す求婚の型も同じくらい涙ぐましい。

雌のいる網の糸を外から弾く奥床しいノック型(オニグモ)、踊りを披露するダンス型(ハエトリグモ)、餌になるものを捕らえて持参するプレゼント型(アズマキシダグモ)、相思相愛のロマンス型(ジグモ)、脚先に触れて身動き出来なく

する催眠術型(コクサグモ)、しつこく追い回すストーカー型、果ては隙を見て不意に襲い掛かるアタック型まである。

そして、ストーカー型と思われたのが、実は雌の出した誘い糸をたどって行くのであることがその後の研究で分かったり、交接のあと直ぐ逃げなければ雌の餌になることが多いなど、雄の運命は世の男性と余り変わる所がない。

クモは人間と似通った振る舞いをするだけでなく、大いに人間の役にも立っている。水田のウンカ・ヨコバイ類、樹木に害を及ぼすスギタマバエ、アメリカシロヒトリなどを毎日大量に捕食駆除している。

*7には農業試験場での調査データとして、水田におけるクモの生息数は最盛期の十月で十アール当たり五八、〇〇〇〜九九、〇〇〇、そのクモが一日に捕食するウンカ・ヨコバイ類の個体数は一〇〇、〇〇〇〜二三〇、〇〇〇という数字が出ている。

家の中でも、日本で二番目に大きく嫌われ者のアシダカグモは実はゴキブリを捕食退治する偉大なる貢献者であり、ハエトリグモはその名の通り沢山のハエを捕つてくれる。

また、このハエトリグモを使ってハエを捕らせ、それを見て楽しむ、あるいは二人で各自秘蔵のハエトリグモを放ち、どちらが先にハエを捕るかを競争させる遊びが江戸時代、寛文後期〜享保前期の約五十年間、江戸、京都で流行った。この遊びに登場するハエトリグモが本文表題に掲げた「座敷鷹」である(*8、*10)。

当時、鷹狩りを將軍に遠慮した大名や大身旗本の間でゲームが流行り出し、それがステータスとして富裕な町人層に波及しブームとなったと、*10の作者は推察している。〔図説俳句大歳時記〕「蠅虎」考証にやや詳細な文献が、『角川俳句大歳時記』「蠅虎」考証にもほんの一節が掲載されている。）

そして、クモを用いたもう一つの遊びが所謂「クモ合戦」である。夏の季語「蜘蛛合せ」（傍題・蜘蛛合戦）として『九州・沖縄ふるさと大歳時記』に最初に掲出され、最近の話題書（*4）にも紹介されている。これから例句が増えて行くと思われるので、ここに少し解説をしておく。

まず、現在、年中行事として行われているクモ合戦は全国で三カ所、鹿児島県始良郡加治木町の「くも合戦」（六月第三日曜日）、高知県四万十市の「全日本女郎ぐも相撲大会」（八月第一日曜日）、和歌山県海南市の「コガネグモ相撲大会」（七月）が知られている。何れもコガネグモの雌によるもので、その体験記が*11の「エッセイ」にある。

また、*8は横浜での少年時代、ホンチ遊び（千葉県房総半島から神奈川県三浦半島にかけて流行ったネコハエトリの雄によるクモ合戦）の洗礼を受けクモ学者になった著者が全国のクモ合戦について調査したものである。

それによると、日本のクモ合戦は北は函館から南は沖縄の八重山群島まで、主として古い漁港のある町村を中心に全国に分布する。戦わせたクモはコガネグモが断然多く、クモ合戦は主としてコガネグモが自然に分布する所と一致している。

クモ合戦は黒潮の流れに沿った漁民文化であり、大昔、漁民たちはコガネグモを大漁の神様と考え、クモを戦わせることによって漁の吉凶を占った。そして、それが長い間を経て時代が変化するうちに、次第に原始信仰の影が消えて占いとしての意味が失われ、大人の娯楽から更には子供の遊びへと変化して行ったのではないか。クモ合戦やクモに関する様々な伝承のことを考えると、そのように思われると*8には書かれている。

最後に、そのクモに関する伝承について述べる。文頭に書いたように、私がクモについて調べ始めたのは雛祭の夜である。夜のクモは縁起が悪いと聞いた記憶があるので気になり、早速ネット検索してみた。結果は、朝グモは良いが夜グモは悪いという説が確かにある一方で、夜グモが良いというものも沢山あったのである。

*8、*9も参照し、その一部を紹介すると、九州ではクモのことを「コブ」と言い、「夜にコブ」で「よろこぶ」という意味合いとなる。また、『日本書紀』には允恭八（西暦四一九）年に「我が天子が来べき夕なり小竹が根の蜘蛛の行ひ今宵著しも」という衣通郎姫の歌があり、夜のクモは待ち人の来る兆しであるとする説が古くからあったことが分かる。そして、フランスには「朝の蜘蛛は悲しみ、昼の蜘蛛は心配、夜の蜘蛛は希望」という諺がある。

クモ全体としても、アイヌ神話ではクモは悪戯好きで愛嬌のある良い神様で、ヤカラ・カムイ（網を作る神）、ヤコル・

カマイ（網を持つ神）などと呼ばれ、狩や漁の守護神と考えられ、沖縄にもクモを大漁の神様とする言い伝えがあった。

また、隣国の中国では、クモの巢は天を、それから垂れ下がるクモは天から降って来る喜びを意味し、細いけれど粘り気のあるクモの糸は離別を伴う人と人、限りある現実の世界と富貴・不老・神秘・仙界とを強く結ぶ力を持つものと信じられた。そして、この考え方が日本にも入って来て、平安時代には盛んにクモのことが和歌に詠われるようになった。

その一方で、能・歌舞伎の「土蜘蛛」、民話「食わず女房」などクモを悪役とするものは多く、『古事記』、『日本書紀』、『常陸国風土記』には大和朝廷に従わなかった地方豪族あるいは異種族の「土雲」、^{つちぐも}「土蜘蛛」を退治した話が出て来る。

クモは人間の味方であると考える「クモ合戦文化」は日本列島に早くから住み着いた人々の文化であり、クモは邪悪なものであると考える「土グモ文化」はその後やって来た征服民族の文化であるという仮説を*8の著者は述べている。

この仮説の正否についてここで論じる力など私にはないが、恐怖や嫌悪は対象に対する無知から生まれるということは言えるような気がする。クモを知ることがクモを好きになる第一歩であり、自然を知ることまた然りであると思う。

地球上の生物はモネラ界（原核生物）、原生生物界、植物界、菌界、動物界の五界があり、動物界には三十五の動物門がある。そして、「ヒト」とは動物界・脊索動物門・脊椎動物亜門・顎動物下門・四肢上綱・哺乳綱・獣亜綱・正獣下綱・

霊長目・サル亜目・サル下目・ヒト上科・ヒト科・ヒト亜科・ヒト属・ヒト種・ヒト亜種に属する動物界の一亜種に過ぎない。このことだけを以てしても、人間はもつと自然を知りクモを知り、もつと自然の中で謙虚であるべきことが分かるうというものである。

*12によれば、地球上の生物種の数は控えめに見ても一億に達すると推定され、そのうち現在までに発見され命名されているのは約一七五万種である。地球史の中で、これまでに生物種の大きな絶滅は五回あり、一番近いのが中生代と新生代の境界で約六五〇〇万年前に起こった恐竜の絶滅である。

過去五回の大絶滅の主な原因は地殻変動、火山活動、異常気象、巨大隕石の衝突などの自然災害であったが、進行中の大絶滅は人間活動が主な原因となって起きている。そして、現在その絶滅の速度は自然に起こる絶滅の千倍以上、学者によつては約十三分に一種という予測もある。

人類は太古の昔から人類自身を含む生物多様性の中に生きて来て、この関係は未来永劫続いて行く。生物多様性が織りなす不思議で複雑かつバランスの取れた生態系の中でのみ、人類の生存は保障される。

自然は人間など容赦なく潰してしまふ力を持つている反面、人間活動によつてあつげなく崩壊してしまふ脆弱さもまた含んでいる。生物の大絶滅が人類に及ぼす影響は計り知れず、他の生物が減んでいく中で人間のみが生き残ることは絶対にありえないのであると、同サイトの文は結んでいる。

クモの種類	網型(空欄は網なし)	出現期	産卵期	特 徴
キシノウエトタテグモ	網型	一年中		寺社、学校、公園、人家の庭。地中に扉 <small>しほ</small> 付横穴。
ジグモ	管状住居網	一年中	八～九月	樹木・草の根元、塀・石垣の下などで地中生活。
イエユウレイグモ	シート状不規則網	一年中	六～八月	屋内に生息、天井、荷物の間などに網を張る。
ミズグモ		一年中		水草の間にドームを作り、世界で唯一水中生活。
クサグモ	棚網	七～十月	八～十月	草木の間。子グモは卵囊内で越冬、翌春出て来る。
ウヅキコモリグモ		一年中	三～十一月	人家の庭、公園、畑地、草原、樹林に生息する。
イオウイロハシリグモ		六～九月	七～九月	平地～山地。草・低木の葉上、草間で獲物を待つ。
アズマキシダグモ		五～七月		里山の雑木林、林道・水辺の草間で徘徊する。
ササグモ		五～八月		平地～山地の草木、草間。葉上で獲物を待つ。
ヒラタグモ	放射状受信糸網	一年中		建物の周囲に生息。糸に触れた虫を捕らえる。
ヒメグモ	シート付不規則網	八～十月		都市部～山地。樹木の枝葉間、草間に生息する。
フタオイソウロウグモ		六～九月		都市部～山地。他のクモの網に侵入し居候生活。
セアカゴケグモ	不規則網	一年中		敷石の間、塀・ゴミ箱の下、側溝の中に生息。
ジヨロウグモ	蹄型円網	八～十一月	十～十一月	都市部の庭から林道、溪流まで広く生息する。
イエオニグモ	正常円網	七～十一月		人家の軒下、駅舎の窓・天井、店先、街路灯。
コガネグモ	正常円網	五～九月	七～八月	家・林周辺、水田・河原・草原の草木に網を張る。
ゴミグモ	正常円網	四～九月		庭園、公園、生垣、樹木の枝葉、草間に生息。
アシダカグモ		一年中	六～八月	建物の天井、障子、壁、塀、縁の下で獲物を待つ。
カバキコマチグモ		七～九月		スキの葉を巻いた住居に潜み、夜間活動する。
ネコハエトリ		四～八月		庭、生垣、公園、草原、林の葉上に袋状住居。
アダンソンハエトリ		六～八月		人家の壁、塀を徘徊し、ハエ、カを捕食する。
デーニツツハエトリ		一年中		平地～山地の葉上、樹皮下に袋状住居を作る。

参考文献

- * 1 『角川俳句大歳時記』（角川学芸出版編、二〇〇六年、角川書店）
 - * 2 『図説俳句大歳時記』（角川書店編、一九六四～一九六五年、角川書店）
 - * 3 『九州・沖縄ふるさと大歳時記』（角川文化振興財団編、一九九一年、角川書店）
 - * 4 『語りかける季語 ゆるやかな日本』（宮坂静生著、二〇〇六年、岩波書店）
 - * 5 『日本のクモ』（新海栄一著、二〇〇六年、文一総合出版）
 - * 6 『原色日本クモ類図鑑』（八木沼健夫著、一九八六年、保育社）
 - * 7 『クモの話』（八木沼健夫著、一九六九年、北隆館）
 - * 8 『クモ合戦の文化論』（斎藤慎一郎著、一九八四年、大日本図書）
 - * 9 『飛行蜘蛛』（錦三郎著、二〇〇五年、笠間書院）
- 参考サイト
- * 10 「江戸と座敷鷹」（水喜習平作、<http://www.0105.jp/~mizuki/haetori100.html>）
 - * 11 「虫めぐる」（関根幹夫作、<http://www.cyberoz.net/city/sekine/MMZ.htm>）
 - * 12 「宇宙船地球号のゆ〜く」（<http://park10.wakwak.com/~ooki/index.html>）